

平成 30 年 9 月 4 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01994

研究課題名(和文)フッサール初期・中期時間論の分析とその認知言語学的展開

研究課題名(英文)An Analysis of Husserl's Theory of Time-Consciousness and its Cognitive Linguistic Development

研究代表者

宮原 勇 (MIYAHARA, Isamu)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90182039

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：フッサールの時間論に至るヨーロッパ哲学での時間論の系譜を辿るという意味で、まずアリストテレスの『自然学』とアウグスティヌスの『告白』での時間論を構造を分析し、また、John Ellis McTaggartの論文"The Unreality of Time"の時間論との比較を行った。McTaggartの論文は、観念論という存在論を前提とし、単に時間というものが経験的実在性という特性を持つものではなく、我々の意識への現出そのものとしての現前こそが「今」という時間性としての概念を保証するものであることを明らかにした。そして、フッサールの『内的時間意識の現象学』の分析を行い、そのアポリアを指摘した。

研究成果の概要(英文)：In this project the western philosophical history of theories of time or time-consciousness until the Husserl has been investigated, and especially focus of the investigation upon the Aristotle's *peri Physicos* and Augustine's *Confessiones*. And further we investigated John Ellis McTaggart's *The Unreality of Time* and we concluded that he presupposed a kind of idealistic ontology and he asserted that time has no empirical reality and at the same time asserted that 'Presence' which means appearing itself towards our consciousness supports the concept of the temporality of 'now'.

研究分野：哲学、現象学

キーワード：時間論 現象学 アリストテレス アウグスティヌス フッサール

1. 研究開始当初の背景

フッサールの時間論はもともと 1905 年の『内的時間意識の現象学に関する講義』の原稿を核にしてハイデガーと E・シュタインが編纂し、1928 年に *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung* の第 1 巻に発表された。しかし、このテキストはどのような草稿からどのような方針で構成されたのか明確ではなく、テキスト内部の整合性や図表の表記の仕方などに問題があった。戦後、1966 年に *Husserliana* の Bd.X として Rudolf Boehm の編纂にて、1893 年から 1917 年までに書かれた時間に関する包括的なテキスト群が刊行され、この時期の時間論の全貌が垣間見られるようになった。しかし、まだ *Jahrbuch* の章立や構成を前提としているので、それを読む者にとって整合的な理解が容易ではない箇所もみられた。この段階では編纂者 Boehm は各テキストが何年のいつ頃執筆されたのかもそれぞれ明確にはしているが、推測の域を出ない箇所も多々あった。

この *Husserliana* Bd.X 全体の内容が、ルーヴァンのフッサール文庫の Rudolf Bernet によって、テキストの一部修正と執筆年代の修正がなされ、昨年 2013 年 Felix Meiner の PhB 版として刊行された。今回の本研究は、最終的にフッサール文庫による文献批判の成果が公表され、そのような執筆年月が確定したことを承けて、可能となったといえる。

2. 研究の目的

本研究は、現象学の創始者フッサールの初期と中期における時間論の全体像を、テキスト執筆の時間系列を辿りながら再構成するとともに、その時間論で問題となっている〈知覚における感覚と統覚との連関〉と「志向性」としての過去把持(Retention)と未来把持(Protention)の特性を明らかにすることに目的があった。そして、さらに、イギリス

のヘーゲル派哲学者であった J. Ellis McTaggart の論文 *The Unreality of Time*(1908)と著書 *The Nature of Existence, Vol.2* (1927)での時間論の分析を通じて、時間論一般の概念装置を抽出し、その概念装置によって上記のフッサールの時間論の特徴を明確化し、現代の言語学上の有力な立場の一つである認知言語学の言語学的時間論と対比させ、認識、意識、そして言語といった領域での〈時間〉概念の意味を明らかにすることに目的がある。

3. 研究の方法

本研究では、フッサール初期時間論の形成の過程にあつて、知覚と知覚対象の「同時性」にまつわるテーゼと認識論上の図式、つまり〈感覚内容とそれを活性化する統覚〉というスキームは認識作用一般にどの程度まで妥当するかが扱われる。そのためには、各テキストの執筆年月が正確に確定されねばならなかった。この問題に関する議論は、昨年 2013 年に Stefan Gerlach が *Ist das Bewusstsein mit sich und seinen Gegenständen zugleich?, Zu Husserls Modifikation der Zeittheorie um 1909 (Zeitschrift für philosophische Forschung, Band 67, 2013)*なる論文で展開した。本研究はまずは *Husserliana X* に収録されているテキスト内で何らかの転回が生じたのかを検証し、そしてこの初期の時間論に関わる他のテキストをその執筆年月を辿りながら、上述の問題に関して検証していく。

また、そのようなフッサール初期時間論のテキスト解釈のみならず、申請者がこれまで行ってきた現象学の〈認識と言語に関する理論〉を認知言語学、特に Ronald W. Langacker の認知言語学に関する著作群 (*Foundations of Cognitive Grammar, Vol. I, 1987, Vol. II, 1991, Concept, Image, and Symbol --- The Cognitive basis of Grammar, 1991, Grammar und Conceptualization, 2000,*

Cognitive Grammar ---A Basic Introduction, 2008, *Investigations in Cognitive Grammar*, 2009)に見られる認知言語学の理論を援用しその意義を明らかにするという研究に時間論を結びつける。今回のプロジェクトは、特に時制(tense)や相(aspect)に関する議論を検討するとともに Vyvyan Evans (*The Structure of Time*, 2003)らの認知言語学者たちの時間や時制に関する理論を検討する。そして、そのような作業を通じて、最終的には時間にまつわる言語表現の背後には、どのような概念化(conceptualization)があるかを分析する。その Evans の研究書でも現象学の議論が紹介されている。そのようなことからうかがい知ることができるように、時間表現をテーマとして、現象学と認知言語学との学際的展開が近年ますます必要となってきた。

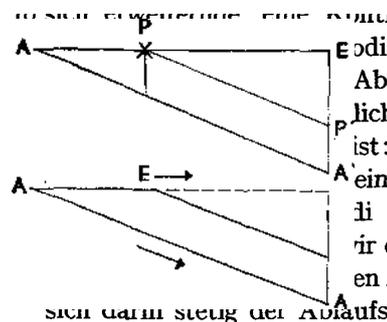
また、未来把持や予期に関して積極的に分析されているフッサールの1910年代後半の *Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewusstsein* (1917/18)が *Husserliana* Bd. XXXIII [本研究では、この『イデー』1913年以降の時間論を中期の時間論と呼ぶ]として刊行され、それに基づいて *Husserliana* X では明確でなかった未来把持の機能と構造が研究されつつあった。Protention に関しては、Shaun Gallagher と Dan Zahavi の独創的な解釈(Cf. S. Gallagher & D. Zahavi, *The Phenomenological Mind*, 2008)などがあり、特に知覚の志向的構造の分析において、過去把持のみならず未来把持の積極的機能の解明がなされつつあった。

以上のように、*Husserliana* Bd. X のテキストにまつわる研究は、ようやくテキスト批判が終了し最終的に執筆年月が確定され、フッサールの時間分析の時間的发展が正確にたどれるようになったことにより、可能となった。また、それを未来把持の側面に関して論じている Bernau 草稿に関しても国内外に

おいて研究がなされつつあるが、前期時間論との関連でかなり正確に発展のプロセスをたどれるようになった。

4. 研究成果

具体的作業としては、特に *Husserliana* 第33巻 *Die Bernauer Manuskripte über das Zeit-bewusstsein*(1917/18)として刊行された草稿の原文(タイプ打ちされた原稿とフッサール直筆の速記原稿とそこに描かれた時間意識の、「ダイアグラム」と呼ばれる図表)の調査にドイツの Freiburg 大学のフッサール文庫を訪問した。この調査においては、実は *Husserliana* 第10巻として刊行されているテキストに付随されている図式の中で、極めて重要なダイアグラムが失われている、ないしはもともと存在しなかった可能性もあることが確認された。これはもともとフッサールの草稿を Edith



Stein と Martin Heidegger が彼らの独自の方針によって、Husserl 生存中、1928 に *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung* Bd. IX に掲載されたのだったが、当該のダイアグラムの一部の記号が変更された可能性がある。原文はどのようになっていたかは、Freiburg 大学のフッサール文庫に関する限り、紛失していたのである。したがって、さらに、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学のフッサール文庫を訪問し、草稿を調査するとともに現在同文庫の所長であった Rudolf Bernet 教授(引退)にインタビューをする必要性が生じている。また、再度ドイツのフライブルク大学のフッサール文庫を訪問し、Husserl と Heidegger 関係の文献や草稿の調査をする必要性が出てきた。

また、McTaggart の The Unreality of Time での主張を検討し、それがヘーゲルの観念論的認識論を前提とすることを明らかにした。そして、それをフッサールの内的時間意識の現象学的分析と対応させて論じた。また、その際に認知言語学での時間表現に関する分析を検討し、時間を一つの流れというメタファーによって表現される場合、二種類の概念化が背後にあることを論じた。つまり、時間現象はその際、二つの互いに逆の方向の流れとして表象されている。しかし、それは、同一事態を、視点を変えて記述したものであり、一つは主観化の視点であり、他方は客観化の視点、つまり相互主観化の視点からの記述であることを明らかにした。

さらには、フッサールの時間論に至るヨーロッパ哲学での時間論の系譜をアリストテレスの『自然学』と、アウグスティヌスの『告白』での時間論の構造を分析し、前者を宇宙論的時間論、後者をフッサールの時間意識の分析に先行する心理学的時間分析ととらえながらも、アリストテレスの時間概念における「数」なる要素に主観的な契機を見出した。

また、20 世紀前半に活躍したイギリスのヘーゲル研究者 John Ellis McTaggart の論文 The Unreality of Time の時間論における時間概念分析を行った。McTaggart の論文は、観念論という存在論を前提とし、単に時間というものを経験的実在性という特性を持つものではなく、我々の意識への現出そのものとしての Präsensこそが「今」という時間性としての概念を保証するものであることを明らかにした。このことは、フッサールの時間論の根本的主張とつながるもので、従来のフッサールの時間意識の現象学の議論に於いては、欠けていたもので、学界において大いに貢献するものといえる。

5 . 主な発表論文等
(研究代表者は下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

宮原勇、時間論の系譜(その1) アリストテレスとアウグスティヌス、哲学フォーラム、査読無、15、pp.1-10、2018

宮原勇、McTaggart のテーゼ: 「時間の非実在性」の真の意味、名古屋大学哲学論集、査読有、特別号、pp.165-180、2018

宮原勇、The Mental Lexicon and the Architecture of Encyclopedia、Journal of School of Letters (Nagoya University)、査読有、13、pp.27-44、2017

宮原勇、言語コミュニケーションの基盤としての相互主観性、哲学フォーラム、査読無、13、pp.79-90、2016

宮原勇、フッサール初期時間論の基本概念とアポリア(1)、名古屋大学文学部研究論集(哲学61)、査読有、pp.45-72、2015

宮原勇、認識とカテゴリーについて、哲学フォーラム、12、pp.52-81、2015、査読無

宮原勇、時間と生をめぐって ハイデガーとフッサール、Heidegger-Forum、招待論文、9、pp.1-18、2015

[学会発表] (計 4 件)

宮原勇、A Destruction of Subject and A Quest for Self: Fundamental Differences between Nishida and Watsuji、The Second Conference of ENOJP (European Network of Japanese Philosophy)、2016

宮原勇、Sign and Concept ---A Consideration of Saussure's Cours de linguistique générale from the Standpoint of Phenomenological 'Cognitivism'、Saussure, Cours et nous. Colloque international à la

mémoire du centenaire du Cours de
linguistique générale、2016

宮原勇、哲学における時間論の系、メタ
ファー研究会、2017

宮原勇、主観の解体と自己の探求、比較
思想学会東海支部、2016

〔図書〕(計1件)

宮原勇、水声社、松澤和宏編『21世紀
のソシユール』、2018、pp.125-138(記号
と概念—現象学的認知主義からのソシ
ユールの『一般言語学講義』の考察)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

名古屋大学大学院人文学研究科 教授
宮原 勇 (Miyahara Isamu)

研究者番号：
90182039